

立命館大学 政策科学 別冊 (1996年 3月) 抜刷

「ワイマル友の会」とドイツ文学研究の諸問題

林 睦 實

「ワイマル友の会」とドイツ文学研究の諸問題

林 睦 實

はじめに

「ワイマル友の会」は一九九一年五月に、ほぼ四分の一世紀に及ぶその活動に終止符を打った。会の愛称とも言うべき「ワイマル友の会」の名称を補完する意味で、正式には「日本—DDRゲルマニスティク交流促進協会」の名が併記され、文字どおり、「DDRとの学术交流を通じて日本のゲルマニスティクの偏りを是正し、その健全で民主的な発展をはかる」ことを目的に、一九六七年九月末に設立された学会¹⁾であった。日本独文学会の歴史に前例をみない「政治的分裂組織」として、国内外から偏見の眼で見られるのではないかとする慎重論が、日本独文学会の内部からも噴き出して、設立時には、少なからぬ論議を巻き起こした新学会でもあった。そして、この学会の解散の一年前、一九九〇年五月に、いわば「敗戦処理投手」の立場を十分に意識しながらも、あえて最後の会長職を引き受けたのが、他でもなく、今回の記念論集を捧げられる辻善夫氏であった。筆者は一九六〇年代以降、氏の親しい旧友の一人として、あるいは一時期の同僚として、さらにまた、上記学会の苦楽を共にした仲間として、あまりにも多くの私情に満ちあふれた思い出を共有している。しかし、以下の小論ではそれら全てを割愛して、われわれがこれまで「本業」として係わってきたドイツ文学研究のいくつかの論点に的をしぼり、ささやかな自省と総括のための試論を書こうと思う。

I. 「ワイマル友の会」はなぜ生まれたのか

若い世代のゲルマニストにとって、「ワイマル友の会」とは一体なんであったのか、知識も関心も時の経過とともに忘却の彼方へ移りつつあるかに思われる。一九六七年九月に創設されたこの新学会が、まさに東西両ドイツの分裂という第二次世界大戦後の超大国の二極構造のなかで、生まれるべくして生まれた日本のゲルマニトの学術組織であった。一九六四年の東京オリンピックの機会に、初めて来日したドイツ民主共和国（以下、東ドイツと略す）のハンス・ベンツィーン文化相の率いる政府代表団を、当時はまだ大阪大学の大学院生であった筆者と協力して恩師、故八木浩氏が世話係と通訳の労をみずから買って出た時点から、事件ははじまった。直ちに、大

阪の「ゲーテ・インスティトゥート」は八木氏に対して「一切の出入り」を禁止した。当時、世界でも悪名の高い「ハルシュタイン・ドクトリン」の、(ただし、大国「ソビエト連邦」のみを例外とする) 恐らく日本における最初の適用例ではなかったかと思われる。もちろん、京阪神地方のゲルマニストの多くは、このような排他的措置に明確な抗議の意思を表すために、各地で熱心に署名運動を広げたが、これはいわば事件の第一幕であった。

東京でも「日独文化の会」を中心に、すでに故人となられた北道文、井上正蔵、道家忠道その他のゲルマニストによる東ドイツ文学の翻訳・出版活動が始まっていた。関西のゲルマニストたちとの共同作業として出版された空前のヒット作『裸で狼の群れのなかに』(ブルーノ・アーピッツ著)²⁾は、例え部分的とはいえ、日本のゲルマニスティクの内部に進行している地殻変動の明らかな兆しであった。やがて、事件の第二幕が始まる。一九六六年五月、舟木重信理事の提案による「ワイマル写真展」(ドイツ民主共和国-日本友好委員会提供)が当時の日本独文学会理事会の承認を得て学会の会場で開催された初日に、ドイツ連邦共和国(当時の西ドイツ)大使館員の「政治的宣伝の匂い」が強いという異議申立てを受け、緊急の学会理事会の同意によって即時閉鎖に踏み切った事件³⁾である。

当時ワイマルに早稲田大学の公費で研究滞在中の学会理事、故中村英雄氏はこの決定に抗議する理事会宛の書簡を、同年六月にワイマルから東京へ発送した。「私は、なによりもまず一人の日本人として、日本人が自主的にやった展示をドイツ[連邦共和国]大使館の抗議にあって閉じたという事実[...]に赤面し、いたたまれない思いをいただきます。[...]われわれが自主的にやる催しについて、一々ドイツ大使館の許可を求めなければならぬのでしょうか。日本独文学会の自主性はどこにあるのでしょうか。」⁴⁾

日本独文学会を標的にした「ハルシュタイン・ドクトリン」の第二の適用は、新学会「ワイマル友の会」の設立に向けて、さらに大きな弾みをつける、思いもよらぬ結果を招いた。ワイマル古典文学研究所(以下、NFGと略す)総裁の故ヘルムート・ホルツハウアー氏から、同年の一九六六年秋に日本独文学会理事会に対して、両国間のゲルマニストの人的・物的交流の促進に関する四項目の文書提案がおこなわれたのである。日本独文学会としては「これに可能なかぎり応じたい」旨の返答をおこなったが、しかし当時はまだ日本政府にとっても、東ドイツは事実上地球上には存在しない国家であった。公的な学術交流には渡航ビザの問題はもとより、冷戦構造の枠組みのなかで、そのような両国間の学術交流を制約する状況を何らかの形で乗り越えるためには、どうしても新組織の設立を必要と感じる声は、「ワイマル写真展」以降、急速に増えつづけた。一九六七年九月末の「ワイマル友の会」の創設は以上のような背景の下に実現し、それからわずか一年後に、会員数は二四〇名近くになっていた。

初代会長に就任した大山聡氏はその頃を回顧して、「『ワイマル展示会』の一件では、私達はまさに学問が、政治的な状況やその折々の政策に弄ばれることに反対したのですが、当時は私達の態度をかえって政治的と評価する声しきりでした。その事を知っていた私達は、もちろん日本の側の立場から、われわれの学問研究をほんとうに豊かにする結果を生むようにとくに気を配りながら、DDR側との握手の道を探りました。そのような事がきっかけとなって、私達の帰国

後に『ワイマル友の会』が発足しました⁵⁾と、ある雑誌に寄稿している。

Ⅱ. いわゆる「大山・ザイフェルト論争」の意味するもの

文学とその研究がいつの時代にあっても、その折々の政治的システムのなかで機能してきたことは、たとえ審美主義的立場からの反論によってさえ、否定しえない事実であろう。とりわけドイツの近現代史は、そのような例証にほとんど満ち溢れているといっても過言ではない。例えば、『ドイツ人の詩的国民文学の歴史』（一八三五～一八四二年）⁶⁾によって、「古典主義文学の理念をブルジョワ階級の政治闘争のなかに取り込もうとした、最初の偉大な学問的試み」⁷⁾をなし遂げたとされるゲオルク・ゴットフリート・ゲルヴィーヌスを考えてみてもよい。ベルリンの法学者サヴィニーや歴史家ランケらの、政治的リベラリズムに敵対するスローガンとしての「客観性」を論駁しつつ、ゲルヴィーヌスは、「対象を客観性そのものの姿で現出せしめよ」という歴史的記述のやり方の基本原則を完全に否認する立場から、「自分なりの判断、自分なりの意見」をもって新しい質のドイツ文学史を記述するのである。彼にとって、この文学史記述は市民の政治意識を覚醒するための、そしてドイツの政治史が今なお達成していない国民的課題を実行に移すことに他ならなかった。彼の歴史思考は、たとえヘーゲルの図式に負う面が少なくないとしても、ドイツ史はルターの姿をとって完成した宗教の時代から、ゲーテとシラーによって頂点に到達して完結する芸術の時代を通り抜け、いよいよ政治の時代に突入するという基本構想に基づいている。言い換えれば、「過去の歴史の再構成と現在の歴史的機能との統一」⁸⁾こそ、反体制の文学史家ゲルヴィーヌスの学問的ディスクルスの狙いであったといえる。

およそ一世紀半前にドイツのゲルマニスティクが初めて到達していた地点からみて、日本のそれはどのような展開の道筋をたどってきたのか、紙幅の関係からここで詳論することはできない。しかし、一八八七年から、エーミル・ハウスクネヒト、カール・フローレンツらの「お雇い外国人」が東京帝国大学でドイツ文学の講義を始め、やがて一八九三年に同帝国大学でドイツ文学科が設置され、一八九五年には学術誌『帝国文学』が創刊されて以降の、約一世紀に及ぶ日本のゲルマニスティクの歴史は、筆者の知るかぎり、大山聡氏の論文「過去と現在の日本のゲルマニスティクに関する若干の考察」（東京都立大学『人文学報』）⁹⁾において、初めて総括的な視野からの批判と自己批判の対象となった。翌年の一九六八年二月には、ヨハネス・E・ザイフェルト氏の部分的反論が、弘前大学人文学部『文経論叢』に発表された。「ゲルマニスティクの自己批判に寄せる日本の論考」¹⁰⁾がそれである。

言葉の厳密な意味で、これら両者の紀要論文を「論争」と位置づけるのは、たぶん不正確と言われかねない。主要な論点では、大山氏の主張に同意しつつ、しかし三つのテーゼに論点を限定して、ザイフェルト氏は反論を試みている。それに対する大山氏からの再反論は、しかし行われなかった。いわば「反論なき論争」はもちろん両者の勝ち負けとは無関係に、日本におけるドイツ文学研究に内在する本質的諸問題を析出する大胆な第一歩として、けっして看過したり過少に評価されたりしてはならないと考える。まして前者の紀要論文の公刊が「ワイマル友の会」の結

成の時期と符合し、その筆者が初代の会長に就任した事実をも重ね合わせて考慮するならば、この六〇年代の「論争」には実に重大な今日的意味が含まれていたことを、今さらながら痛感させられる。

大山氏の主張は、論者のザイフェルト氏によって「二〇のテーゼ」にまとめられているが、以下の記述ではそのようなテーゼの形をとらず、両者の見解が基本的に一致する論点と、鋭く対立する論点に分けて考察してみたい。まず第一に、日本の近代化の過程でプロイセン（ドイツ）から導入され、一つの自立した学問として自己形成を遂げていくゲルマニスティクの構造的問題を、支配的な政治権力との関連でとらえようとする共通の視点が挙げられる。「富国強兵」の近代化の途上にある日本にとって、周知のように、「上からの革命」によるビスマルク流の「飴と笞」の近代化政策は、他に類例を見ない「偉大な範例」に他ならなかった。そのような枠組みのなかで、ドイツ古典文学の研究も「近代日本の、上からの意志により、上から保護された文化」の枠外で成立、発展することができなかったという事実が確認される。（まさにこの点が、最初から「反体制の学問」として成立したドイツのゲルマニスティクとの根本的な違いであろう——林による補注）

とはいえ第二に、ごく少数の例外を除けば、日本におけるドイツ・フィロロギーの移植作業のために、かなりの長期間にわたる「雑学的知の集積」の段階が不可避であった。具体的には、独和辞典の編纂、文献学的方法と理論の習得など、ドイツ文学受容のためのある程度のレベルへの到達は、先人の人並み外れた努力をもってしても、けっして容易ではなかったのである。このような状況は、一方では、当時の特定の思想状況に対するゲルマニスティクの態度決定を判断不能に陥れる原因の一部になった。しかしまた他方では、日本のドイツ文学研究がある種の方向性を志向する成熟期に入ると、いわゆる「ドイツ的内面性」の絶え間ない強調と賛美の道を追求するようになる。この方向性は、一九世紀後半以降（ディルタイからグンドルフにいたる「ドイツ精神科学」——林による補注）の支配的ディスクルスの模倣ないし引写しを追い求め、結局は、ドイツ文学研究を全ての社会的関心から閉塞するという、学問的孤高の立場に追いやっていく。

そこから第三に、政治権力により「保護された内面性」という消しがたい刻印は、その後の日本のゲルマニスティクに、強靱で鋭敏な「批判精神」を欠落させ、あえてその実名こそ伏せられてはいるが、ゲーテの翻訳と注釈に献身的な情熱を傾けた同じ研究者が、他でもなく（ハンス・グリムの『土地なき民』、さらにはヘルマン・シェーファアの『現代のドイツ文学』など¹¹⁾の——林による補注）ヒューマニズムに敵対するドイツ・ナチズムの文学を日本で広める先兵の役割をも務めるはめになる。天皇制ファシズムに迎合しなかった僅かばかりのゲルマニストにとっても、ゲーテとマルクス主義は無縁のものとなされ、「ドイツ古典文学がマルクス主義思想の偉大な前提になっていたこと」を、彼らは一度も提示しなかった、と大山氏は主張する。

そして最後に、このような「過去の克服から始める」ことが、日本におけるゲルマニスティクの今日の責務であり、文化交流の視点からいえば、古典文学をも含むドイツ文学研究の目指すべき方向は、過去における国家権力間の関係ではなく、「人民と人民との間」に日本とドイツとの新しい関係をつくりあげることにある、と結論づけている。

ザイフェルト氏の反論は主としてこの結論部の三点に向けて集約される。第一点はドイツ古典主義の「俗物性」は「マルクス主義思想の偉大な前提」にはなりえない、という見方である。「われわれはベルネやメンツェルの流儀で、ゲーテはリベラルではなかったと非難するのではなく、彼は時には俗物にもなることがあったと非難するのである。[...] われわれはけっして道徳的立場から非難するのでもなければ、党派的立場から非難するのでもなく、せいぜい美的ならびに歴史的立場から非難するのに過ぎない」という、マルクスのゲーテ批判が論拠とされる。（ちなみに、この出典は「カール・グリューンの『人間の立場から見たゲーテについて』¹²⁾ から引用されたエンゲルスのゲーテ批判であり、マルクスからのものではない。）さらに続けて、ザイフェルト氏は「官僚主義的な偽りの労働者国家の俗物的な支配層」、なかでも東ドイツの「国家評議会議長」こそ、「全く非マルクス主義的なワイマール古典主義者崇拜の点ですば抜けている」と指摘する。このコンテキストから読み取るならば、マルクス主義と「ドイツ古典主義の俗物性」とは相いれないという主張である。

論点の第二は、(日本の)ゲルマニスティクが学問的水準の高みに達しようとするためには、ドイツ古典文学を批判的に、「美的ならびに歴史的立場から」異化する課題を避けて素通りしてはならない。そのためには、社会的、政治的、歴史的な、透徹した包括的研究と並んで、文学批評を学問として発展させようとしたシュレーゲルの試みを再受容し、それを深化させることが必要である。ゲルマニスティクは自己発見のために、自己からの離脱を図らなければならない。

最後の論点は、「人民と人民との間」の新しい関係とは何なのか。具体性の欠けた抽象論議は全てを言い表しているようで、実は何も言っていないのに等しいという。

Ⅲ. 一九七〇年代の「ワイマール古典主義論争」

カルチュ・ラタンに端を発する「大学紛争」は、瞬く間に当時の西ドイツの各大学にも飛び火して、在来の価値概念や権威あるシステムを揺るがしていく「若者の反乱」となった。一テンポ遅れて、日本の大学もその渦中にあった。当時の東ドイツは、西側からの波及効果を水際でくい止めるために厳しい検問体制を強化していた。今から思えば、それらはヨーロッパの枠組みを越えた世界的なシステム変動の前兆現象であったにちがいない。東ドイツ国内では、最初はゲオルク・ルカーチ批判の形をとりながら、批判の矛先はしだいにドイツ古典文学研究の牙城、ワイマールのNFGの聖域に向けられていく。その点火剤を国外から提供したのは、ヨースト・ヘルマンとラインハルト・グリム¹³⁾であり、それに呼応するかのようになり、直ちに東ドイツ国内で論争の仕掛け人として浮上したのが、プレヒト研究家(今日すでに解体された東ドイツ科学アカデミー文学史中央研究所員)ヴェルナー・ミッテンツヴァイであった。

ナチズムの崩壊後の空白期に、西ドイツに次いで建国された「ドイツ民主共和国」の指導的理念は、何よりもまずゲーテの古典主義的ヒューマンイズムのなかに求められた。ワイマールの古典主義的ユートピアを、戦後におけるドイツ文学研究のほとんど絶対的な規範として位置づけ、マルクス主義的生産美学の理論的支柱の役割を確立したのは、言うまでもなく、ハンガリー出身の

世界的文芸学者ゲオルク・ルカーチであった。彼の文学史と文芸理論はとくに四〇年代から五〇年代にかけて、「ハンガリー動乱」のなかで「修正主義者」の烙印を押される時点まで、東ドイツにおける文芸学の発展に絶大な影響力を発揮しつづけてきた事実を、だれもが否定できないし、また否定すべくもない。

東ドイツのゲルマニスティク史において、いわば「ブレヒトかゲーテか？」の二者択一を迫るまでに先鋭化した激烈な論争は未曾有の事件であった。ミッテンツヴァイによれば¹⁴⁾、東ドイツの文学研究はこれまでどっぷりとルカーチ理論の影響下に潰かっていたために、およそ六〇年代の初めまではブレヒトは「社会主義リアリズム文学の本流から逸脱した作家」として冷遇され、「ルカーチ批判が進むなかで、ブレヒトへの転換が始まった」という。ドイツ古典主義に対して、ブレヒトが生産者の立場からたえず重大な関心を払いつづけ、批判的な、時には拒否的な（例えば、ゲーテ・シラーの往復書簡をさして、両者の「謀略」とさえ断じるほどの）見方さえしていたことは、『ブレヒト・作業日誌』¹⁵⁾からも明らかに読み取れる。ブレヒト側のゲーテ批判の核心は、フランス革命を「理念」として容認しながらも、その革命的「実践」に反対するワイマール古典主義の美的プログラムにあった。つまり、「政治的解放をもとめず人間解放を〔…〕既存の社会的可能性の枠内ですすめること」は、結局彼らの美的プログラムに負の効果をもたらさずにはおかなかったはずであり、ゲーテとシラーの決断は「当時のドイツにおいて可能な選択肢の一つにすぎなかった」と論難している。裏を返せば、東ドイツの古典文学研究が、例えば同時代のマインツ・ジャコバン派が選択した政治的・美的立場とを比較し、分析するような方法論的基礎をもたず、依然として昔のままの「ゲーテ・シラー中心主義」に固執していることを、あからさまに攻撃したわけである。

このようなゲーテ批判が、主としてルカーチの大リアリズム論によって構築された「調和と完成」の古典主義像と真っ向から対立することは論をまたない。「テューリンゲン王国の文化大臣」とまで皮肉まじりに称賛されたNFGの辣腕の政治家、故ヘルムート・ホルツハウアー総裁は、「ドイツ古典主義に対するブレヒトの関係は〈ありきたりの功利主義〉の域を出ず、「規範的な意味における偉大な古典主義者ゲーテを正しく理解するのに、ブレヒトは不適格な師匠である」¹⁶⁾と切り捨ててしまう。一九六〇年代末から七〇年代の終わりまで、ベルリン、ハレ、ワイマールのゲルマニストを興奮させたドイツ古典主義論争は、“Weimarer Beiträge”と“Sinn und Form”の各誌上で約一〇年にわたって展開され、決着をみないままに終結する。この点に、ブレヒト・ルカーチ論争の長年にわたる深刻な亀裂を読み取ることは、あながち不当とはいえない。

IV. 「パラダイムの転換」と東ドイツの文芸学

ほぼ時期を同じくして、東ドイツの文芸学に焦点を合わせた「受容美学」からの挑戦が、西ドイツ最南部のコンスタンツ大学で複数ジャンルの理論グループを形成していたロマニストの一人、ハンス・ローベルト・ヤウスから突きつけられる。『挑発としての文学史』¹⁷⁾がそれである。ヤウスの受容美学は、一方ではシェラーの実証主義、ディルタイの精神科学、シュタイガーの

作品内在解釈など、これまでの文芸学的方法の「パラダイム」がゆき詰まった隘路からの離脱を目指しつつ、同時に他方では、フッサール流の現象学（インガルデン、ガーダマー等）、ロシア・フォルマリズム（トゥイニャーノフ、エイヘンバウム等）、チェコ構造主義（ムカジヨフスキイ、ヴォディチカ等）の理論的成果を批判的に取り入れながら、ヴェルナー・クラウスの著作を通してマルクス主義文学理論にも接近していた。

ヤウスのいう「文芸学の今日的挑発」の狙いは、いったい何であったのか。彼の主張によれば、「マルクス主義とフォルマリズムの方法論争のなかで、未解決のままに残されている文学史的問題をふたたび取り上げる」こと、すなわち、芸術作品の「自立性」の概念を解体して、文学と社会との間の引き裂かれた絆を、新しい受容理論によってふたたび結び合わせようとする狙いである。そのような認識の前提には、フォルマリズムの方法と並んで、マルクス主義的リアリズムの反映論が芸術作品をもっぱら「模写する機能」にのみ還元して、芸術のもつ「現実を形成する機能」を不当にも抑え続けてきた、とする否定的実例がある。文学と社会との歴史的関連を一面的に下部構造からしか見なかったプレハーノフがそうであり、あるいはまた、弁証法的反映論の中心に規範的・超歴史的な「古典」概念を据えつけたゲオルク・ルカーチもその代表的な一例である。マルクス主義の反映論がその「アポリア」から逃れるためには、ヤウスによれば、「芸術作品の本質は叙述し、表現する機能のなかにのみあるのではない」ことを認め、そこから文学の歴史を再構築する重要な足がかりを獲得しなければならない、という。すなわち、「文学や芸術は作品を生産する主体のみならず、それを消費する主体によっても、つまり作家と公衆との相互作用によって作品の連続性が媒介される」のであり、そのような通時性と共時性が交差するところから、初めて「プロセスとしての歴史」が生まれるというのである。

このようなヤウスの「挑発」は、七〇年代の東ドイツの文芸学に少なからぬ衝撃をあたえたことは、容易に想像できよう。前章で述べた「ワイマール古典主義論争」をいわば静観の構えで沈黙していたクラウス学派の直系の弟子たち、なかでも英文学者のワイマン、仏文学者のナウマン、そして独文学者のトレーガーが真先に、批判的ながらもきわめて柔軟な反応を示したことは十分注目に値すると思われる。彼らは主として、ヤウスの受容美学の「テーゼ」に示された「期待の地平」と「読者」の概念に対して批判的な視線を注いでいる。が、同時にまた、ヤウスの「挑発」を自己省察のバネにする生産的な頭脳の持ち主でもあった。例えば、ワイマンはトレーガーの自己理解をさらに一歩進めて、大胆にこう言い切っている。「ルカーチの著作では（彼ばかりではないが）主として現実を叙述するという観点から、現実の形成要因としてではなく、文学をとらえる《叙述美学》が構築された。それは文学の作用でなく、文学の生産を考察し、作家の仕事に目を奪われて読者の活動を見落として、後者を文学理論と文学史の研究上の基礎に組み込まなかった美学である。」¹⁹⁾ 自己批判をからめての、これは東ドイツの文芸学の位置確認でなくて何であろうか。

一九七三年に刊行されたナウマン・グループの『社会—文学—読書。理論的視点からの文学の受容』¹⁹⁾ の基本構想は、疑いもなくヤウスの受容美学があたえたインパクトを抜きにして考えることはできない。東ドイツにおける最初の、試論的性格をもつこの受容理論的構想を見ると、

文学の生産と受容は相互に切り離せない弁証法的プロセスの二つの側面として位置づけられ、両者の関係はそれぞれ歴史的に規定された文学的コミュニケーションの体系の一部を構成し、「受容素案」としての文学作品がどのような「文学諸関係」のもとで、どのように機能するかといった理論的諸問題をいわば手探りで解明しようとする試みであった。と同時に、科学アカデミーを発信源とするナウマン・グループの構想は、ヤウスが彼自身の受容美学に期待していた「パラダイムの転換」を、皮肉にも七〇年代末から八〇年代の東ドイツのマルクス主義文芸学のなかに呼び起こす兆候でもあった。

しかしながら、一九九〇年の東ドイツという名の「現存する社会主義」の終焉は、この国の文学と文学研究の精神的・物質的基盤をも根こそぎに解体する。まさにそのシステム崩壊の真っ只中で、ライナー・ローゼンベルクは東ドイツの文芸学、とくにリアリズムの理論の「パラダイム」について批判的総括を試みている。この理論がマルクス主義文芸学にとって不可欠の「パラダイム」とされた要因を、ローゼンベルクは学問外の、「政治の側からの浸透」にあったと規定している。五〇年代にソ連から東ドイツにもちこまれた「フォルマリズム論争」は明らかにその実例であり、「西側の頹廢文化を排斥する」ために、他でもなくリアリズムの理論が「冷戦構造に援用された」と指摘する。東ドイツの制度化された学問のなかで、リアリズムの理論にそむくコンセプトが一切黙認されない時期があったことは事実としながらも、しかし彼はこの理論を「文学研究のパラダイムとして、ひたすら否定的に描くことも妥当ではない」と主張する。その論拠として、東ドイツの文芸学が五〇年代の末以降に「啓蒙主義研究、疾風怒濤期の研究、フォーアメルツ研究、さらにはドイツ労働者文学研究などの分野で達成した、今でも色あせしていない成果」は、総じてこのパラダイムのもとで生まれていることを挙げ、さらに続けて、彼はこう述べている。「その同じパラダイムがロマン主義研究や近代文学研究にとって、重い障害になったことも事実である。表現主義、二〇世紀ドイツ文学、亡命文学などにかんする東ドイツの定評のある研究論文はかなり最近の時代に、七〇年代と八〇年代に由来するものである。」²⁰⁾

疑いもなく、これら近年の研究成果は東ドイツの文芸学の内部で進行していた「パラダイムの転換」とけっして無関係に考えるわけにはいかない。基本的には、マルクス主義的世界観の座標（つまりは、社会主義を世界史の展望として、「現存の社会主義」体制をみずから資本主義体制にたいする最善の選択肢として捉える見方）を維持しながらも、「学問の脱イデオロギー化」のプロセスが、古典主義論争のような公共の場で、そしてまた、文学史記述のようなイデオロギー的コンセプトからの離脱という形で、あるいは激烈に、あるいは静かに水面下で進行していたと考えられる。すでに見たように、七〇年代末の受容美学的な、「機能的コミュニケーション」理論のパラダイムが東ドイツの文芸学に定着していくにつれて、「学問の脱イデオロギー化」のプロセスは、恐らくだれもが予想しえなかった新段階を迎えることになる。

V. 「東ドイツの文学」とは何であったのか

まるでスフィンクスから投げかけられた難問の前で、途方に暮れている旅人のように思うのは、

たぶん小論の筆者だけではあるまい。ブレヒトやゼーガース、ごく最近ではハイナー・ミュラーやクリストフ・ハイン等の少数の作家を例外にしても、例えば信貴辰喜氏の作成した綿密な文献目録の試み『日本語に訳されたDDR文学』²¹⁾を通して、「東ドイツ文学」の全体像を垣間見ることは不可能にさえ近い。これには、もちろん受容する日本側にも文化の移植を左右する様々な要因があったことは想像に難くない。一九四九年の建国以降、その崩壊までの四〇年の歴史は、ヒトラーの追跡や迫害を逃れて世界の各地に亡命した反ファシズムの作家たちの戦後文学から始まり、シュテファン・ヘルムリー、ヘルマン・カント、クリスタ・ヴォルフ、クリストフ・ハインらの世代を経て、プレントラウアーベルクの詩人たちの反体制的形式実験の文学に至るまで、前章で述べた「パラダイムの変遷」と不可分に結び合い、同時にまた、豊かな多様性をも模索した四〇年であった。

H. ヒルリッヒ、G. クラット、I. ペルガンデの共同執筆による『文学史記述におけるDDR文学』（一九八九年二月）²²⁾のなかでも、「DDRの文学（ないしは特定の作品や作家）が次第に国際的な討論と関連付けられ、そこで受け入れられるにつれて、DDR文学というわれわれの概念は厳密にしなければならない」と書いている。東ドイツの危機的局面を意識してかどうか、執筆者たちの戸惑いに似たある種の焦燥感は、このような行間からも読み取れる。冒頭でこの共同論文は、「ドイツ民主共和国の文学」（シリーズ『ドイツ文学の歴史』第十一巻）²³⁾を批評の対象として取り上げている。「現存する社会主義」の終焉という事後認識の立場からみれば、東ドイツ文学の歴史を「社会主義的国民文学の発展のパラダイム」として記述した点に、執筆者たちはこの書「本質的な功績」を認めているが、しかし今となっては、やはりアナクロニズムの印象は拭いきれない。

まず脳裏に浮かぶ最初の疑念は、いったいドイツに実態としての「国民文学」がかつて存在した例しがあったのかどうか、という問題である。古くは、『ハンブルク演劇論』でドイツ人の「国民劇場」を夢見たレッシングの苦闘を考えてみてもよい。あるいはまた、フランス革命期の最中に、あの有名な「文学的サンキュロット主義」への反駁として、「古典的国民文学」の成立条件を論じたゲーテの問題意識にも言及しないわけにはいかない。近代概念としての「国民」がもしも統一された国家国民の共同体を意味するのであれば、少なくとも一八七一年の「上からの統一」まで、小邦分断状態のドイツでは、実態をもたない架空概念にすぎない。しかも後発国の近代化がどのような惨事をその後のヨーロッパにもたらしたかは、もはや説明を要しない。ナチズムの「第三帝国」の時代においてさえ、「祖国を靴底につけて」ドイツを逃れた多くの作家たちは、国外での絶望的な苦難のなかで反ナチ抵抗文学を生みだしている。さらにまた、第二次世界大戦後にふたたび分断されたドイツの東部地域では、「廢墟のなかから立ち上がり、われらは未来に目をむけて、お前のために尽くそう。ドイツよ、一つの祖国よ！」²⁴⁾と声高く歌われたヨハネス・R・ベッヒャーの願いは、一九七四年の東ドイツ憲法の改正によって、その歌詞からさえも消えていく。「二つの国家、二つの国民」（zwei Staaten, zwei Nationen）というスローガンのもとで、東ドイツの政権党がみずからドイツの半永久的な分断政策を選んだからに他ならない。初期マルクスの言葉をパラフレーズして言えば、ドイツ人はヨーロッパの諸民族と「近代」の感覚を部分

的に共有しながら、「近代」の実態をみずから体験できなかった悲劇的「国民」ではなかったのか。

第二の疑念は、言うまでもなく「現存する社会主義」体制の崩壊にともなう「社会主義的」概念の有効性をめぐる問題である。周知のように、壁の「開放」から人民議会選挙、つまりスターリン主義的国家体制の自己解体にいたる「転換につぐ転換」は、その当時、連日のように街頭デモで叫ばれた「われわれこそが人民 (das Volk = 主権者) だ!」のスローガンの実現には至らなかった。「強大なスターリニズムを助産婦として生まれた」東ドイツの中央管理・統制型社会主義から決別して、「人民所有プラス民主主義、世界中のどこにも実現していない人類未踏の試み」を提唱したフォルカー・ブラウン、「社会主義の言葉をカリカチュアにしない社会主義、人間を構造に従属させない人間らしい社会」の実現を主張したクリストフ・ハイン、「下からの革命的刷新」による「祖国の根本的転換の始まりに、われわれは今こそ立ち会おう」と呼びかけたクリスタ・ヴォルフらの夢想²⁵⁾は、すべて無残にも打ち砕かれた。一九九〇年に始まる資本主義的「ドイツ統合」によって、「新連邦州」という名の東部地域にいま深刻な矛盾が露呈している。

VI. 結びにかえて—ドイツ文学の「アイデンティティ」?

とくに七〇年代のフランスから急速に西側に広がり始めた「ポスト構造主義」の様々の流れは、例えばバルトやデリダ、あるいはリオタールのように、文学作品を「終わりなき戯れ」の記号表現とみる「エクリチュール」、心理・意味・現実性などの古典的概念の「脱構築」によって、歴史における「発展」とか「進歩」の概念を解体するディスクルスの試みである。にもかかわらず、その言説の多くがヘーゲル的な「歴史の終焉」論と符号しているかのように見えるのは、何とも皮肉な現象ではある。

ローゼンベルクの確信によれば、東ドイツの文芸学は「政治的・哲学的論拠にもとづく歴史の楽天主義を喪失して、自分たちの《偉大なストーリー》から決別した後でさえ」、「ポスト構造主義的コンセプトをほとんど受け付けなかった」²⁶⁾という。それでは、作家たちはどうであったのか。この問題を検証する紙面の余裕はほとんどなくなったが、文学の「アイデンティティ」に対して独特のスタンスを取っている東ドイツの二人の作家、ハイナー・ミュラーとクリストフ・ハインを手掛かりにして、「ポスト近代」の問題を最後に考察してみたい。一九九〇年九月に東京で開かれた「東西ドイツ作家・文学者による討論会」に出席したミュラーは、「ドイツ文学はつねに一つしか存在していなかった」とする(西ドイツの文学者フォスカムプや岩淵達治氏の見解と対立する)テーゼから出発して、こう述べている。「私は東ドイツのアイデンティティなるものはなかったし、今もないと思います。あったのはむしろ、アイデンティティを持つことへの拒否でした。そしてそれも知識人層の仕事のひとつだったと思います。アイデンティティを拒否し、アイデンティティを持つことを避けるということです。」²⁷⁾

この発言の裏面には、『訂正』や『賃金の抑圧者』等の作品以降、東ドイツの文化政策から排斥されながらもアングラ活動を展開し、ブレヒトを今日に継承する反体制的異端児の苦渋にみち

たシニズムが潜んではいないと、はたして言い切れるであろうか。この見方は、たぶん事態を全面的ではないにせよ、少なくともその一面を示唆していると思われる。と同時に、「ポスト近代」の知識人が共有する自己理解がミュラーの発言のなかにも、共時的コンテクストとして理解できる一例は、大江健三郎と対談したエドワード・W・サイードの発言にもある。「断片化されたアイデンティティ、複数のアイデンティティ。[...] 文学はアイデンティティを固めるのではなく、複数化する。このアイデンティティの複数化こそ比較文学の核心です。単一のアイデンティティがつねに異なるアイデンティティによって対照され、爆撃され、攻撃される。それこそ重要です」²⁸⁾ とエルサレム出身の比較文学者サイードは語っている。

『龍の血を浴びて』の作品によって西側でも反響を呼び起こした作家クリストフ・ハインは、先輩格のゼーガースやヴォルフ等と違って、みずからの立場を「年代記作家」として位置づける。ハインは、作家が作家自身とアイデンティファイしない独自の文体をつくりあげ、彼の作品を受容する読者の自由な判断や解釈にまかせようとする。いわば、従来の啓蒙主義路線から意識的に離脱した文体と言い換えてもよい。一九九四年のフランクフルト書籍見本市の開会式の演説のなかで²⁹⁾、彼はやはりこの問題にふれて「啓蒙主義は書籍を抜きにして、書籍印刷を抜きにして考えられなかった。今日求められている複数のアイデンティティ (Mehrfach-Identität) はそれに対応する様々なメディアのなかで生まれ、文学がその障害になっている」と述べている。このような主張の前提には、かつての啓蒙的教養主義の時代とは根本的に異なり、現代では、もやは個人をたった一つのアイデンティティに縛りつけられる文学生産はありえないし、むしろ逆に、個人には多様なアイデンティティが開かれていなければならない、とする認識がある。

とはいえ、ハインは書物が貴重な文化財として、「歴史的、人類史的価値をもつことを認めるべきである」と強調しながらも、「その時代史的価値が小さくなり、どんどんと消滅している」ことをも見過ごすべきではないと主張する。さきに紹介した東西ドイツの作家会議の席上で、ミュラーは、市場経済の支配が文学の潜在力を損ねるのではないかと深く憂慮していたが、東ドイツのいわば最後の第三世代を代表するハインにとって、「年代記作家」としての文学生産が「ドイツ統合」後の「ポスト近代」を生き延びるための作家的戦略であると言えるかも知れない。

注解

- 1) 日本各地のゲルマニスト七五名が発起人となって、会は9月30日に早稲田大学で設立された。会の「設立趣旨」には、「われわれ日本の研究者にとって、[...] 東西二つのドイツを客観的かつ平等に視野に入れることが、学問研究をすすめるうえで不可欠の前提と考えられます。そのためには、東西両ドイツの学界と自主的かつ自由に接することが必要です」と明記されている。本文に引用した箇所は、1973年5月の第7回総会決議からのもの。
- 2) Apitz, Bruno: *Nacht unter Wölfen*, Halle (Saale) 1960. この日本語訳は1961～1962年に資誠堂から出版され、その後、文庫本として新日本出版社から、上下二巻で出版された。
- 3) この事件に関しては、会の最終号となった『研究報告』16号(1991/5)に掲載された信貴辰喜氏の寄稿「ドイツ民主共和国の終末に当たって『ワイマル写真展事件』をかえりみる」(101～110頁)をぜひ参照されたい。

- 4) 中村英雄「舟木重信宛書簡」(氏の遺稿集『池上草堂雑記』、角川書店、1989年刊、394～397頁)
- 5) 大山聡「捧げることば。一九八八年一〇月二五日、故中村英雄さんの葬儀での弔辞」(『世界文学』No.69(1989/5)、116～119頁)
- 6) Gervinus, G. G.: *Geschichte der poetischen National-Literatur der Deutschen*, Leipzig, 6 Bde, (1835-1842). Vgl. auch Gervinus: *Selbstanzeige der Geschichte der poetischen Nationalliteratur der Deutschen*. In: Gervinus: *Schriften zur Literatur*, hg. v. G. Erler, Berlin 1962, S.123
- 7) Mehring, Franz: *Die Lessing-Legende. Zur Geschichte und Kritik des preußischen Despotismus und der klassischen Literatur*. Berlin 1953, S.65
- 8) Weimann, Robert: *Gegenwart und Vergangenheit in der Literaturgeschichte. Ein ideologiegeschichtlicher und methodologischer Versuch*. In: *Methoden der deutschen Literaturwissenschaft*, hg. v. V. Žmegač, Frankfurt/M. 1971, S.349.
- 9) この論文の表題はドイツ語原文からの日本語訳。Oyama, Satoshi: *Einige Bemerkungen über die Germanistik Japans in Vergangenheit und Gegenwart* (東京都立大学『人文学報』61号、1967年3月、45～54頁)
- 10) Seiffert, Johannes E.: *Ein japanischer Beitrag zur Selbstkritik der Germanistik* (弘前大学人文学部『文経論叢』第3巻3号、1968年2月、49～55頁) なお、両者の「論争」については、主として丸山真男の視点から論説した下程息「ドイツ文学研究に関する若干の問題点」(『世界文学』37号、1970年11月、8～12頁)がある。
- 11) 星野慎一訳による『土地なき民』全4巻、「純粹に民族精神を体現している」とナチズムの作家たちに賛辞を送った木村謹治の『現代ドイツ文学』への序文など、神品芳夫編纂の「日本におけるドイツ語文化回顧展」カタログ(郁文堂刊、1990年)は、受容史に係わる多くの具体例を収集した注目すべき資料である。
- 12) Engels, Friedrich: *Karl Grün: Über Goethe vom menschlichen Standpunkte*. Darmstadt 1846. In: Marx/Engels: *Über Kunst und Literatur*, Berlin 1967, Band 1, S.468.
- 13) Grimm, R./ Hermand, J.: *Klassik-Legende*, Frankfurt/M. 1971.
- 14) Mittenzwei, Werner: *Brecht und die Probleme der deutschen Klassik*. In: *Sinn und Form*, Heft 1/1973, S.135～168.
- 15) Brecht, Bertolt: *Arbeitsjournal*, 2 Bde. mit einem Anmerkungsband, Frankfurt/M. 1973
- 16) Holtzhauer, Helmut: *Von sieben, die auszogen, die Klassik zu erlegen*. In: *Sinn und Form*, Heft 1/1973, S.186～187.
- 17) Jauß, Hans R.: *Literaturgeschichte als Provokation (der Literaturwissenschaft)*, Frankfurt/M. 1970 [1. Aufl.], S.144～251.
- 18) Weimann, Robert: *"Rezeptionsästhetik" und die Krise der Literaturgeschichte. Zur Kritik einer neuen Strömung in der bürgerlichen Literaturwissenschaft*. In: *Weimarer Beiträge*, Heft 8/1973, S.17～18.
- 19) Naumann, M./ Schlenstedt, D./ Barck, K./ Kliche, D./ Lenzer, R/: *Gesellschaft – Literatur – Lesen. Literaturrezeption in theoretischer Sicht*. Berlin u. Weimar 1976.
- 20) Rosenberg, Rainer: *Zur Geschichte der Literaturwissenschaft in der DDR*. 未発表の同名の原稿は、まず『ドイツ文学研究史』(林睦實訳、大月書店、1991年9月刊)の「補論」として発表され、加筆・修正された同名の論文は、1991年から復刊されたゲルマニスティクの学術雑誌*Zeitschrift für Germanistik*, Berlin – Bern – Frankfurt am Main – New York – Paris – Wien, Neue Folge, Heft 2/1991, S. 247～256に掲載された。

「ワイマル友の会」とドイツ文学研究の諸問題 (林)

- 21) 信貴辰喜「日本語に訳されたDDR文学。文献目録の試み」(「ワイマル友の会」発行『研究報告』7号、1982年5月、92～108頁)
- 22) Hillich, R./ Klatt, G./ Pergande, I.: *DDR-Literatur in der nationalen und internationalen Literaturgeschichtsschreibung*. In: *Zeitschrift für Germanistik*, Leipzig, Heft 1/1989, S.45～70.
- 23) *GESCHICHTE DER DEUTSCHEN LITERATUR*, Band 11: *Literatur der Deutschen Demokratischen Republik*, Berlin 1976 [1. Aufl.]
- 24) 井上正蔵訳「ドイツ民主共和国国家」(『ベッヒャー詩集』、弥生書房、「世界の詩 69」、148頁)
- 25) これら作家の街頭デモでの発言は『ベルリン 1989』(東ドイツの民主化を記録する会編、大月書店、1990年刊) 14～57頁からの引用。
- 26) Rosenberg, R.: a.a.O., S. 254. — 前記の日本語訳書では、317頁。
- 27) サイド、E.W.「大江健三郎との特別対談『生の終りを見つめるスタイル』」(岩波書店『世界』、1995年8月号、39頁)
- 28) ミュラー、H.「東西ドイツ作家・文学者による討論会〈ドイツ統一とその文学への影響〉」(日独協会機関誌『Die Brücke—かけ橋』No.435/1990, 5～12頁)
- 29) Hein, Christoph: *Prägungen*. Eröffnungsrede der Frankfurter Buchmesse 1994. In: *Freitag-Extra*, Die Ost-West-Wochenzeitung vom 7. Oktober 1994, Nr. 41.

(HAYASHI Mutsumi, 早稲田大学文学部教授)